

【エッセイ】「ちょっとあなた、待ってよ。お婆ちゃん、お婆ちゃ〜ん」

マンションの隣室のドア。僕の顔を見るなり叫んだのはケアマネの女性だった。

一時間後。僕は隣室でひとり暮らしのお婆ちゃんとふたり。お婆ちゃんの部屋には机も椅子もなかった。家具類は今朝方、引っ越し業者が積みこんでいった。簡単な食器と身の回りのものが少しあるだけ。がらんと広過ぎるリビングの床に直接、座っていた。

お婆ちゃんは段ボール箱からアルバムを取りだして思い出を紡ぎ始める。壁にもたれて。

海外出張の御主人と欧州に住んだこと。最終的に腰を落ち着けた先はドイツ。娘が誕生した。彼女はバイオリンが好きで成人しても演奏の勉強を続け、やがて、御主人が急逝。お婆ちゃんは帰国。ひとり娘はドイツに残った。音楽家と結婚。当地で結構な評価をもらうようになった。その娘から昨秋、電話がかかってきた。「お母さんに会いたい。もう十年以上久しく会っていないからぜひ会いたい。日本に行く」

「私は膝を痛めて歩くのも不自由でね。病院通いしてたの。もうすぐ年末で忙しいし日本は寒い。桜の咲く頃いらっしやい。いま来てもらっても会えない……そう言った。意地でしょ。すると年が明けてすぐ、娘の旦那さんから知らせが来たの。彼女が死んだって。末期の癌だったって。私にとっても会いたがっていたって……」

お婆ちゃんの目は虚ろだった。声が震えた。泣いたのは僕だった。高い窓から夕陽が射しこんでいた。

カップをふたつ渡された。「もらって頂戴。もうこれくらいしか残ってなくて。東京にひとり暮らしはもう無理。記憶を失わない内に話せてよかった。姉が東北にいます。古屋だけど実家が空いてるって。私は姉の近くに行きます」

タイミングを図っていたのだろう。ケアマネの彼女が戻って来た。

「よかったわねえお婆ちゃん。ずっと言っていたんです。隣の人と話がしたい。どうしても聞いてもらいたいことがあるって。突然のお願いを聞き届けていただけて、ありがとうございました」

いま、不思議に思う。どうしてお婆ちゃんは、挨拶を交わす程度の僕を相手に選んだのか。ケアマネの人は、なぜそれをお婆ちゃんにとって、大切な用件と判断したのか。

どうして彼女に……僕が昨年、息子を亡くしていたことがわかったのだろう。

いま僕の手元にラベンダーが描かれたマグカップがある。ごく淡い紫のラベンダーだ。